

2024年10月6日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教12「永遠の命へ」

民数記21：4～9、ヨハネ3：7～15

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くのかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」(8節)「風」「霊」これは同じ言葉です。ギリシア語でプネウマ、ヘブライ語でルーアハ。創世記、天地創造の初めにこのルーアハが出てきます。「神の霊が水の面を動いていた」(1：2)ニコデモは律法の教師ですから、イエスさまのこの言葉を印象深く聞いたのではないのでしょうか。イエスさまは、人は新しく生まれなければ、水と霊(ルーアハ)とによって生まれなければ、神の国に入ることができないとおっしゃった。そのように霊から生まれる者、新しく生まれる者が、どこから来て、どこへ行くのか、あなたには分からないとイエスさまはニコデモに言われます。それなら、イエスさまがどこから来て、どこへ行くのか、この目で確かめてみよう。それでニコデモはイエスさまを追いかけていたのかもしれませんが。でも、それは彼自身のことでもありました。自分の人生がどこへ向かっているのか。それが知りたくてニコデモはイエスさまのところに来た。それはわたしたちも同じではないでしょうか。

どこから来て、どこへ行くのか。ここにヨハネ福音書の重要な主題があると申し上げてよいでしょう。イエスさまは「自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っている、しかしあなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない」(8：14)と言われます。この「どこから来て、どこへ行くのか」それは、何よりもイエスさまがどこから来て、どこに行くのかを示しています。しかし同時に、わたしたちがどこに向かっているのか、その目標、完成を見据えた表現でもあります。そして、その目標、ゴールこそ、「神の国」であり(3：5)、「永遠の命」(3：15)なのです。

わたしたちの人生も、この世界も神さまが始められたものです。それを最後まで、完成まで神さまが導いてくださる。それが神さまの摂理です。ローマの信徒への手紙に「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(11：36)とあります。そのために神さまは、イエスさまをくださいました。イエスさまが、この世界を、わたしたちの人生を贖い、完成へと導かれるのです。どんなにこの世界が希望の持てないものであったとしても、わたしたちの人生が暗く闇に閉ざされたようなものであっても、わたしたちはその光の中で、自分の人生を見ることができ、この世界を見ることができのです。『ハイデルベルク信仰問答』で使徒信条の「永遠の命」について次のように告白します。「この生涯の後には、目が見もせず耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたような完全な祝福を受け、神を永遠にほめたたえるようになる」(問58)と。これは単なる気休めではありません。わたしたちの人生を根底から支える希望です。

では、その救いは具体的にどのようにもたらされるのでしょうか。「天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」(13～15節)ここには、「降る」とか「上る」という言葉があります。「人の子」イエスさまは天から降って来て、そして天に上る。どこから来て、どこへ行くのかここを示されています。これはキリスト教の教理で言えば、降るは「受肉」であり、上るは「昇

天」でしょう。まことの人としてお生まれになられ、十字架で死なれ、三日目によみがえられて、そして天に昇られる。どうしてこのような動きをなさるのでしょうか。それはわたしたちの救いのためです。わたしたちがどこへ行くのか、その道をお示しになられるために他なりません。

ここに不思議な言葉があります。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」(14節) 今日民数記の御言葉を合わせて読みました。イスラエルの民は、せっかく奴隷の国エジプトから救い出されても、目の前の試練に耐えられず、その目的を見失い、神さまに文句を言います。そこに人間の罪の姿があります。その民の不満を聞いた神さまはお怒りになられ、裁きとして蛇を送ります。蛇は人々を噛んで多くの人々が死にました。人々は悔い改め、モーセは神さまにとりなしを祈るのです。すると神さまは、モーセに青銅の蛇を作り旗竿の先に掲げて人々に見せるように言います。モーセがそうすると、蛇に噛まれても、その旗竿の先の蛇を仰ぐことで助かったという話です。

この話からイエスさまは、旗竿に掲げられた蛇と、十字架におかかりになられるご自身とを重ね合わせておられます。蛇は創世記第3章の誘惑の話に出てくる蛇を思い浮かべることができるでしょう。罪の象徴としての蛇です。目先の困難に耐えられず、神さまの救いを見失う。そのわたしたちの罪を背負って人の子は十字架の上に上げられました。あの旗竿の上に掲げられた蛇のように。

けれども同時にイエスさまは天に上げられました。三日目によみがえられ、そして天に昇られた。その十字架の先に、天への道を開かれたのです。十字架とよみがえり、そして天に昇られたイエスさまによってわたしたちも行くべき道、永遠の命に至る道を行くことができるのです。このあと12章でイエスさまは「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとに引き寄せよう」(12:32)と言われます。「道であり、真理であり、命である」(14:6) そのイエスさまに引き寄せられ、結ばれて、わたしたちもまた永遠の命へと導かれるのです。どこから来て、どこへ行くのか。その道をイエスさまがつけてくださいました。

毎週、わたしたちは教会に集まり礼拝をささげます。この礼拝から礼拝へという一週間のサイクルもまたどこから来て、どこへ行くのかを示しています。礼拝から遣わされ、また礼拝へと帰って行く。それは「神から出て、神によって保たれ、神に向かっている」(ローマ11:36) わたしたちの人生そのものでしょう。そのリハーサルを毎週ここで行っているのです。一週間の生活で何が起こるのか、わたしたちには分かりません。けれどもイエスさまに結ばれているわたしたちは「永遠の命」という行き先が決まっています。

天の父よ。自分がどこへ行くのか見失ってしまうわたしたちです。けれどもそのようなわたしたちを担い、イエスさまは十字架で死んで、三日目によみがえられ、そして天に昇られました。たとえ試練の日々でも、そのイエスさまに結ばれて、そのイエスさまを道として、永遠の命へと導かれていることを信じさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。